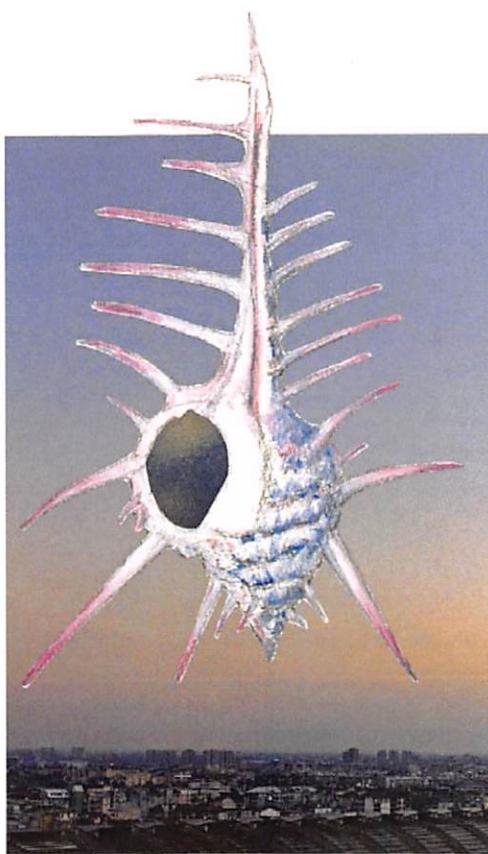


地中海

MARE MEDITERRANEUM

2021. 1



創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の鄉愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しました北上した、すべての未開なもの同化してきただ大きな力、——それをホメロス以来ビカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ氣持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

一〇一二年 一月号 (通卷七五二号)

◇今月の二十首詠……三密深し

関根菜子 2

■作品[A]

A C B A

朝井恭子・磯田ひさ子他 4
和田健二他 18
渡辺英子他 48
浅沼良子他 60
杉浦詩子他 74

■遊覧寄港

『歌よみに与ふる書』 高橋啓子 38

■歌壇月旦

「親父の小言」と「青年の主張」 玉井綾子 65

■十一月号作品批評

A 関根和美・伊東ミイ子 66
坂上直美・近藤栄昭
B 小原香里・梅本武義
C 田中富子

■オリーブ集

宇井秀雄・植月弘子 40
出口和子・高澤匡子 14

A オリーブ集 浜谷久子 66
坂上直美・近藤栄昭
B 小原香里・梅本武義
C 田中富子

■地中海の青春時代

市原志郎 34

久我田鶴子 66
坂上直美・近藤栄昭
B 小原香里・梅本武義
C 田中富子

◇今月の二人
思い出すこと

市原志郎

今月の二人・作品評

久我田鶴子 66
坂上直美・近藤栄昭
B 小原香里・梅本武義
C 田中富子

■地中海小史

—創刊七十周年に向けて

久我田鶴子 36

最近の歌誌より

久我田鶴子 66
坂上直美・近藤栄昭
B 小原香里・梅本武義
C 田中富子

香川進の生きものの歌

田土成彦 39

福島発・風のたより

久我田鶴子 66
坂上直美・近藤栄昭
B 小原香里・梅本武義
C 田中富子

私と短歌との出会い

(221) 荒川信明 17

クリップ 92 神田通信 表3

三密深し

関根 榮子

一九三七年生まれ。
六九年「地中海」入社。
埼玉支社長。
歌集「風いくたび」「椿の門」
「虹の時間」他四冊刊行。
現代歌人協会会員。

いつの間に定着せしや三密を避けよと巷に軽く言い合う

続きたる巣ごもり、自肅人間は群れたがりまた集うものにて

密教の深遠な教えの三密がコロナ禍の世の戒めとなる

倫理的な大乗仏教より生れし密教の教えよせつかくなれば

吽の字を身・口・意の三密に観想するとぞこころみんとす

修行には遠き身にして雑念の湧きくるのみに三密深し

かく説けり広大無辺な生命力コロナ禍の世に浸透あれば

古来より命をはぐくむ存在の天地自然の力受けよと

空海の東密そして最澄の台密ありてまた密の深し

魅せられし十一面観音像　密教の影響と梅原猛は

(奈良・法華寺)

観音の女身におわす湧きてくる生命力に打たれしと　今に

目に見えぬものへの怖れあがきつつ克服せんと人の歴史は

この日々の事態に甦る「不自由を常と思えば」家康のことば

闇年の禍事多しとう言い伝えいつの日何の書で読みいしか

侍つ位置の定められたる人の列静かに動けばふと儀式めく

遊ぶ子のなき公園に団栗の椅の着きしを拾ういくつか

鰯雲大きさからは鯖雲かマスクはずして見上げるしばし

烟道の紫苑の花の風に揺れシベリア原産と知ればはろけし

とりあえず入りし書店にほっこりとする漫画買う『大家さんと僕』

この夜の地球上最も近づきし火星を仰ぐわが干支の星

作品 A

朝井恭子

ポートレート

森

独り飲むコーヒー苦し写真なる夫と窓辺に月を待ちつつ
帰りきて灯しし部屋に父母のポートレートの仄々温し
米も塩も配給の世のありしこと語るに若者「まじすか やばい」
人に倦み帰り来し部屋の夕間にしばし身を置く点ざるまま
「今どきの若者達」と言挙げし姫ら茶房を声高に占む
嘴太のからす電線をステージに「カアー」とひと声テノール披露す
フォルテよりピアニシモへと風の譜を奏でて回る緋の風車

磯田ひさ子

ヒアシンス

森

公園の広き芝生に糸すすきパンパスクラス楼み分けて群る
ゆきあひの片割れ月のたどきなざ在るべきものの薄るるやうで
かくばかり心にひびく浅草の影向堂の鷦尾むき合ひて
をりをりに訪ひくるをさなの笑ひごゑ諍ふこともまること光
ほととぎす瑠璃虎の尾にくじやくさう動物園のやうとちび助
小づかひに買ひしとをさながヒヤシンスの球根ひとつ手渡しくる
短歌には申し訳ないが大切さ一番でもなし二番でもなし

市原志郎

冬の朝

萬

鳥の影二つが過ぎるガラス窓今日久々に輝いている
葉の落ちし桃の木哀れゆらゆらと冬近き風に揺れて止まずも
やがて寒きものに変わるかガラス戸を打ちて去り行く朝の風音
果物を食む食後のひとときに冬を感じる朝となりたり
アメリカの大統領選挙し朝のテレビは何處回しても
冬近き窓の景色を見ついて今日一日を如何に過ごさん
大袈裟な仕種をしつつ天気予報告している人のネクタイ青し

市原やよひ

蝶姉

萬

本番前に孫の振袖見てしまふ前撮りとやら成人式の
青じその葉にひょっこり出で来たる茶色の蝶姉鏡を振らざり
すこすこと去り行く蝶姉生尽きる日も近からん見送っている
草の間に白き花見せ居場所告ぐ茗荷を摘めり一拍のち
介護付きの住居に移ると伝え来し姉は言葉を絞り出す如
住み馴れし横浜離るる姉夫婦九十近くの終の栖に
橙色の小花散り敷く金木犀香り届かずマスクの中には

大浪美雪

花花花

森

神田鈴子

つばぶき

大

季の来て開き初めにし金木犀赤みひめたる黄に輝く
昨秋は咲き遅れたる金木犀今日路地ごとに甘き香をきく
若き日に桂花陳酒と楽しみき香り豊かな小花の沈む
雨上がり庭土を染め金木犀小さきちさき花花花の
故郷の夜坂上の金木犀今年も咲きしや訪ねてみんか
トイレ用芳香剤とまがうゆえ金木犀と子は距離をおく
ちりとなり終りてゆける金木犀いつの日か吾も土に還らん

奥田陽子 淡彩

羊

逸れたるひとりならねど一面のコスモスの中たどりつゆく
われの背を越えぬ高さに揺れているコスモスの群うす紅に白
前日は雨にありしよ打たれたるさま見せずして揺るるコスモス
コスモスの光のなかを歩みきて水湧く池の方へ降りゆく
幼な子の持つ釣り糸の短きにザリガニ掛かれりいたくちいさき
ひかる水脈追いつゆけばかるがもの二羽草の根についばみいたり
鎮もれる椿の大樹花の季にまた訪ね来んしばしを見上ぐ

小野雅子 秋明菊

羊

丈たかく風になびける幾群の秋明菊の白き花々
旅の地の縁先にあり花の名を秋明菊と知りしとほき日
霜降のあしたひらきて揺れてゐるうす桃色の秋明菊よ
遠く病む人を思へばかがやきて昇りきりたる上弦の月
コーディネイトとまではいかぬが外出に選ぶはマスクいつまでつづく
立ち上がるたび足もとに落ちてゐる膝掛ふみて一二歩あゆむ
ラジオにて桃原邑子の短歌を聞く子をうしなひ嘆き果てなし

庭先に銀木犀のかをりたち季節は流るるコロナ禍の世に
来ぬ人を待つにあらねど台風の逸れしを確かめ植木屋は来ぬ
雑草も取り除かれし庭隅に黄のいる咲えて咲けるつはぶき
すつきりと刈り込まれたる庭木々に秋のひかりはやはらかに降る
刈り取られし稻田にひとすぢ煙たち夕闇のなか動く人影
送られしラインの写真に見入りたり吉野の里の紅葉まぶし
孫らより一人ひとりのプレゼント初体験なりわが誕生日

菊地栄子 美術館

湾

駐車場に変われど旧き名残す門一一〇人収容のわが寄宿舎跡
前庭の細き水路の瀬の光ひたせば温き猛暑のいきれ
しなやかな女体の像の痛ましさ九月半ばの真夏日が灼く
額縁に遊ぶ金属の鳥や鹿西洋絵画は豪華絢爛なり
盛り花に菊はありしや西洋画床に房なすはそれらしき花
三岸好太郎・松本峻介知己のこと常設館に心なごます
美術館移転反対に進展なし早や秋空の広瀬の川辺

木村文子 波の音

羊

真昼間の濁みのなかで待つ我にバスはボボウと挨拶をする
灯台の入り口にもあるアルコール免罪を得る我のてのひら
波が去りまた波が来て少しづつ海は足より遠ざかりゆく
億年のめぐりのなかの一滴に出会いぬ波の一粒として
夕暮れはあかるい風を吸い込んでまなこ魚がした一日が終わる
青空の果てから落ちてきたのかもみじ葉ふわり歩道のまんなか
波の音からだにいっぽいつけたまま一人帰りぬ石狩湾より

草刈十郎　案山子

・世

心地よき風に吹かれて秋蟬の名残りの声を聞きつつ行けり
野の色となりゆく案山子曝されてをかしな秋を生きてゐるわれ
老い人の歩行危ふしわれもまた露けきひとり杖の欲しかり
コロナ禍やその他あれこれ何ひとつ解決のなく夏は果てたり
コロナ禍に自粛のわれら自祝する敬老の日三密避けて
とんばうの羽根透き通る空の青歩に秋風の心地よきかな
亡き兄の形見の時計確かなり変りゆく世の時をきさめり

國井節子

夢殿

・春

秋の日の光を受けてかかるがへ自転車走らすお隣さんと
いかるがの三つの塔のあたりには遠近ひろがるコスモス畑
三重の塔の四隅に下げる風鐸といふ音のやしささ
運良くてこの日は太子のお目見得日　夢殿の扉開かれてをり
思ひつつ眼れば太子にまみえたり夢殿のなか光かがやく
夢殿の東に建ちます中宮寺母の為にと太子の建てしと
しづかなる如意輪菩薩のほほ笑みに出逢へてうれし疲れも忘るる

河野繁子

来客

・雁

日和よく花から花に飛び移る浅黄斑の来客ありぬ
「地中海」の表紙かざりし浅黄斑こんな身近に息ひそめおり
いすこゆく浅黄斑か立ち寄るはまたこの道と伝えておかな
山にては絶滅危惧種の藤袴舗装を割りたくましく増ゆ
藤袴このみて旅をするという力みなぎる蝶の残像
長旅の終着いすこ大切な羽を痛めず心してゆけ
横たわりそのまま咲ける野紺菊園児がひとり触りてゆけり

小林能子

「夢」

・羊

入院と決まりしこの期あらたなる抗体検査はCOVID-19
仕舞ひおきし文の筐を開きたり数多の文に蘇る日々
母と子に賜ひし賀状に香川師の「夢」の一文字昭和四十五年
香川夫人の近況として苗村の小野茂樹の墓参り宗一の復帰
讃岐顔はと宣らす夫人に先生はなんぢやと応ふ　赤堤好日
歌は己のためにこそ詠め続けよと導きあれば辿りこし道
入院をひかへて今朝の喜びにタオルの固く絞れたこと

近藤栄昭

バラバラ

・虹

奥深く静かに高く書架並ぶ地中海都市のような図書館
武蔵国聖天様の細き麺武蔵の優しさ麺に隠して
消化されぬ歌の種あり心奥に新陳代謝ならず居残る
散歩道ゴミを見つけて避ける足歩調くずれる寒さもありて
バラバラと單気筒エンジン午前二時彼は走りて我は寝ている
鈍感に見逃す刺激多くなる慢性疾患的歌詠み
松前城小さな天守に威をしめす高ぶる時は性悪説か

近藤芳仙

上海の月

・信

コロナ禍に始めしものの我にあり上海にゐる子へのラインも
春節に帰国し任地へ戻りし子以来コロナに身動き出来ず
出征の亡父のをりたる中国に七十年経て子が赴任する
時折の散歩に撮りし写メールに言葉少なく子は返しくる
我が知らぬ中国人の気質など七十余人を子は束ねる
タイを経て上海に住む子の生活　愚痴もこぼさず健やかにゐる
子は住みて我には未知の上海にこの満月の昇りをらむか

坂上直美 秋

・天

風は秋ようやくかわる季のいろ我が魂も淨まりてあれ
サルスベリ白きが咲きて風に揺る真夏の道に雪と零る
隣なるビルの足場を外す音カソンカンカンと高く響けり
わが夫はミーアキャットか東向くヴエランダに立ち朝の日を浴ぶ
扉と窓となべてを開き風を呼ぶ十月の朝光も入れて
曼珠沙華いつしか姿消えにけり来年も見ん穩やかな日に
何憂う憂えてしかたなきことは憂えぬがよし 天高く秋

坂出裕子 雨

・洛

いつまでも川を見てをり流れゆく水にコロナのこころ放ちて
コロナ禍に疲れしこころ川土手の道にマスクを外したたずむ
秋が来ることを忘れてゐたりしに鳥がついばむ赤き木の実を
やはらかき落ち葉踏みつつ公園の道に己を取り戻しをり
音もなく雨が降りをりもう秋が來てゐるのだと教へてくれて
こんなにもこころ乾きてゐたるかと泪湧きくる静かな雨に
ひさびさの雨がしみゆく心地する乾ききりたる身の内ふかく

佐久間晟

家族

・湾

無為の日に寝そべるわれに寄る蟬も親しきものか頬に遊べる
われに寄る蟬一匹の親しさよ何するとなく去りてはまた寄る
庭草の生きる氣負いの逞しさ摘むをためらい今日も暮れたり
新しき年の初めに何するとなく今日も暮れるか無為の日々
新年を何度も迎えしかこの年も今年こそはと思うのみにて
家族すでに二十人を越えたりき息子二人を成したるのみが
曾孫とは愛しきものよ何するとなく玩具のことく戯れるのみ

鈴木結志

福笑い

・福

初の行福汲む徳汲む宝汲む三度となえて若水を汲む
年明けの淑気にこころみそがれて見る聞くなべて世は新しき
元旦は年の最善福笑い孫曾孫つどい吉辰玲瓏
道真公しのぶ春告草の花学びの道のしぶべを飾る
神祖先と共に「みたまのふゆ」賜う言靈信仰初春の行
積善が福德招く言の葉に生きを重ねておのれを見つむ
手料理の春の七草香のもの膳の主役の初春の芹

閔根榮子 目葉の木

目葉の木

・埼

草多き畠の道もこの頃は散策の人には会うこと多し
つづましく黄花の咲けり野ばろきく葉の形ゆえ櫻櫻の字あわれ
貰いても忘れないし父の文机をふと思ひ出す書案をしつつ
高速道に分断されし古き社彼岸花のみ赤々と炎ゆ
目の飴とう目葉の木のエキス入り淡き期待に求めんとする
その樹皮を民間薬としかエデ科の高木というこの目で見たし
目葉の木という名前の直接さ先人の知恵いつの世からか

佐藤道子 盆灯籠

・甲

盆提灯くるくる廻る盆灯籠亡くての後の華やきさみし
今在せば白寿の誕生祝よと浅間の額を贈りくるるも
真夜深く耳なり大きく聞こえくる亡き夫が寄り添ひくるる証か
耳なりを頼りに夫と話し合ふ今日の買物来てくるるらし
一つのみ山に来て鳴く蜩の淋しかるらむ日暮るる頃を
長雨にどんぐり芽生える山の庭抜いても抜いても抜ききれぬ程
そのままに置けば我が家はどんぐりの林となりて山に還らむ

関根和美 福 増

・堺

滝田靖子 マスク 新

・新

大地震を恐れ都内の大学を受けざりしに何故通うのかと母コロナ禍にあり絶るゆえに母のそば離れずに済む恵みと言わんで叶えましょうよ紅葉狩露天風呂付き秘境の宿に豪州の息子はイクメン読みきかせ入浴の動画は母よろこぼす命の糧「ほんものや」さんの店主遊くまことわが夫支えくれしに押し薺にし四つ葉のクローバーくだされし友よその夫いま病むを知る双の手にあふるるほどの禍福をば味わいしひと月詠うは難し

高尾恭子

絵日記

・大

引き潮の朝の砂浜つややかに無くした貝の鉗をさがす
虹色の貝見つけたり原発のなかった頃の若狭幻影
遠泳の白帽どこへと目に追いぬ和田浜沖を兄と競えば
絵日記をはみだし泳ぐ魚の群れ水晶浜に姉と遊びて
幾とせを日は沈みつつ和田浜の海の絵日記まづくるに塗る
高浜の海とっぷりと暮れゆきて原発マネーの砂山くずす
暮れなずむ浜の真白き原子炉の建屋なかたことにはできぬ

高津砂千子

ほととぎす

・風

忙しいと思ふけど頑張れなどと言ふ患者の元に行かぬおまへは蟹工船のやうな日日だと毒づけば若きナースらばかあんとする戯言は胸に秘めておけ闇ふなら一人でやれと言はれてをりぬ風吹けば風行く方へ靡きゆく草も木末の葉もため息るもの言へば唇寒しもの言はねば心が寒しました咳をするマスクした顔の半分は見えぬのに気付かれてゐるすれ違ふとき雨はいつ上がつたのだらう真夜中のひとりの窓に爛爛と月

竹下妙子 暮秋

・霧

どくだみの聖女のことき白き花かたへに垂る星花ゆるる
熟れ柿のひとつ残れる老木に鳥よ朱の汁お前にあげよう
いつのまに柿みのりて柿みのり木々は木の葉をしづかに落とす
せめて深き眠りを得たし今宵ひとり食べ残したる林檎がにほふ
ありのまま生きたしと思ひ涙出づ風すさぶ夜を一人覚めて
山茶花の落花ひとひら拾ひ上ぐ女ひとりの生きの厳しさ
思ひあぐみ夜毎眠られぬ吾の名を幼く呼びて亡母の出できぬ

田土成彦

風の音

・宙

ひる夜のさかさになりて入院の生活たやすく崩れてゆくも
眠られぬらしき同室三人の動く気配す明け方までを
朝早く向かいのビルに鳩来たりまぶしき秋のひかりを浴びて
手すり頬り上り下りして三千歩めまいおさまり退院となる
リフォームのさなかの家に退院すノコギリの音人声たかし
六日間の留守に散りたる金木犀ひらきそめしは花ほととぎす
万両のまだあおき実のあまたなり掌に乗せてはその実を撫する

田 土 才 惠

銅版画

・宙

中 島 央 子

杉木立

・森

誰にでも思い違いはあるものよ忘れておしまいガタガタゴトン
あの声もこの声も聞こえてくるよう月夜に浮かぶ亡きひとのこと
ともちゃんと呼ぶ声ふつとよみがえるセピア色した写し絵ひとつ
銅版画の少女の瞳わが裡に宿ればもはや置き去り難く
出会いの絵求めて帰る山頂のミュージアムから私の部屋へ
太き根をどしど張りきて山を成す杉の木立の守る靈山
天を指す穂群仰げばじんじんと靈氣足もとより伝いくる

玉 井 純 子

あえなさ

・羊

五十四歳に逝く君あえなさは父の享年三十三めく
この人もここで降りると思ひきや出口をあけただけ すきま風
帰り道横断歩道の白線が立ちて飛び去り信号むくむ
エスカレーターすれ違う方向の人を凝視す君が町の駅
暗闇の追い越し自転車八の字を描き男児の絶叫の波
会社でしか会わない君がパジャマ言い三角帽子を想像する軸
つま先で歩きつつ読書する女子の前に未来が扉を開く

虎 谷 信 子

拾 遣

・伴

白鷺の灰色のつばさ さびしもよ。雪の虚空を 帰路だしかなり
己が心さいなむ日日を 落ち椿 箕にあふれさせ、風に向かふ
朝疾く門の外かけに ひとかかへ、董花むら 置かれてありぬ
田の礼に磨ぐ米 粟の減りたれど、若水にひたし 心をこめむ
朝とく放送にきく 桃原さんの、黒砂糖の歌 そぞろなつかし
杳き日の地中海大会 共に集ひ おほらかなりし 面影のたつ
母上の歌の放送 伝へ來し。桃原さんよ、よき相続が

たかはらの杉の木立に射す日影刻とどまれることしづけさ
熱中症・コロナ禍の世の生きにくさ高原の気を一身に浴ぶ
はびこれるコロナウイルス揮ひゆけ針葉樹林の十年の風
夢にさへ逢はずなりたる父母よ針葉樹林の風を聴くべし
ぐいぐいと犬のリードに曳かれゆく樹林の小径（熊注意）まで
耐へがたき暑さをのがれ峠の湯に手足をのばす今日を嘉する
県境をすぐる車窓にうちつづく高原キャベツの葉群ひかれり

中 島 義 雄

風信の季

・岡

首長きキリンは如何に眠るやと夜半の枕を直して思ふ
ワントッチの傘を開きて君は行きまた風信の季が始まる
立ち尽くし何を得しとも見ぬ驚が帰りゆく見て一日を終はる
目瞑りて笑顔懷へり彼彼女なべて幽界のひとばかりなる
焼き捨てむと取り出す名刺の束いくつ寒き夕べをまた繰りなほす
酒の味識らぬ一世の終はりにて飲んでみぬかと言ふ人もなし
一二日風邪に寝ねしを起き上がり歌詠む今日を幸せとせむ

永 塚 節 子

托 す

・銀

枝先に小鳥が一羽風まかせ診察待つ間見るともなしに
医師の顔言葉遣いに集中す今日の結果を探らんとして
小半時待ちたる後の診察はふたことみこと五分に満たず
変りなき検査結果なればこそ五分の診察良しと諾う
受診終え遅き昼食今日だけは心置きなく食後にデザート
検査終え父への報告その前に花を選ぶに行つたり来たり
来年の手帳を選ぶ穏やかな表紙の色に日日を托さん

白子れい　返り花

・洛

浜本 芙 美

高砂ゆり

・夢

語る吾も聞きいる生徒等もマスクなし
茶道の講演　顔見えぬまま
少しずつ記憶の蓋のはがれゆく危うき胸に講演終る
陽のいまに昇らん空はあかね色浮きいる雲も茜に染めて
ゆきに会えれば帰りを待たず往きに居ねば帰り待ちいる一羽の小驚
寺庭に入りてわが眼を疑えり長月終の日さくら咲きて
いろ淡く花びら小さき返り花み寺の朝の庭に静けし
歩幅小さく物忘れ多くなりて来し吾にもひらけ返り花　ああ

ぱぱりようこ

もしや

・鹿

月牙えるなか咳を残しゆきたる人はもしや亡き義父なるらん
秋の蚊をつれて帰りたるやその夜はいじらしきまでにつきまとわれたり
なにゆえにからすよからす騒ぎ立つ群れあい叫ぶ禍々しさの
ひと夜にて三たびも同じゆめを見る続きづきて連れの夢
不思議なる思いにたぬとうしばしなり深層心理の迷路ただなか
眼底の腫瘍はひだりそのうちに右に進行するやものこと
さすればとしつかり全て見ておこう心眼となるその日のために

浜谷久子

鳩

・地

福田庸子

名主の館

・今

たべものの美味しく夜はよく眠るこれに増したる幸せぞなき
高砂ゆり名残りの長き蕊一本花びら在りたるままに吹かれつ
小雀と鳩が草野と共に食む平和はいいなどしばし眺める
若きらのもろもろの話題傍らに聞きつつ自ずと笑みのこぼるる
浅草に住めるおみなを思いおり鬼灯いちの映像見つつ
ハイビスカス終わりの花を直土に自ら潔くとばしぬ
六十年のおみなに昔を重ねつつ思い出せない日月まばろし

檜垣美保子

デルタ

・昴

住む人の影さえしらずあかときの九階の窓きょううもどもりて
避雷針この指とまれというようふりむきざまにきらりかがやく
外灯の笠にとまりうずくまる鷗の一羽デルタの街の
見て見てと念じて見上ぐ外灯のうえに動かぬ白き一羽よ

ふいにきて鷗水面を打ちたればひかりつづ魚はさらわれてゆく
川の面へ迫り出だし立つ巨木なり倒れぬ不思議をときおりおもう
手を触れて部屋にのこす「またあした」病室の窓の外はきりさめ

だみ声で鳴き交わしゆく鶴二羽ねぐらの森に帰る夕暮れ
早朝を二羽の電線見張り役知の仲間に送るカラス語

人間が来たと知らせるひと声に飛び立つ鶴畠から土手へ
群れ鶴一丸となり目指す烟ピーナツ実入りを何故知っている
司令塔の声に従うその他大勢集団行動乱れぬ鶴
黒ごろも鳥合の衆の知恵から今日はゴミの日早業すでに
鳥瞰図の中にすっぽり入るらしい我が家我が烟ねぐらの近く

上州の訛保ちて生ききりし伯父の声する秋風の朝
夕映えを光背にする山脈の緊まりて深く秋は来にけり
大谷産の屋根石広く敷きめる明治の技の名主の館
うしろでに氏神の杜狛犬の苦むす面おだやかにあり
歳七つ社を押さへて立つ庭に秋明菊の清くゆれるて
明治期の大工の意氣を硝子窓に独逸の柄の枠を納めぬ
柳宗悦絶賛の文通りたる渡辺家住宅手岡の森は

藤田美智子

東シナ海

・新

牧雄彦

生きよ

・大

ヒヨンビンの手紙鶴瓶に届きしと 東シナ海キラ光る
担任われ元気が苦手な児もるたらう澄みわたりたる雲に思へり
前の車のリアガラスに運ばる白雲ふたつ追ひかけてゆく
幸せを呼ぶとふ黒子と泣きぼくろわが顔にある二つのほくろ
われを映す画像に体温も記されて気づかぬうちに計られてをり
ストームグラスに沈みたるままの結晶に心の凝り見る思ひする
「獲り続けることが抗議だ」福島の海守る人のことばの太さ

藤森巳行

秋の夜更け

・銀

松浦楨子

仲秋の月

・羊

赤とんぼの歌をうたつて帰り来ぬ晚秋蚕の桑籠背負ひ
山畑の桑摘み終へて帰る道辛いと思つたことは無かりき
桑摘みの籠を背負ひて母と我夕日に長き影引き帰りぬ
我が家ではお蚕機と大切に育てた繭が現金収入
軒先に地下足袋が干してある風景思ひ出すなり秋の終りに
リンゴ園の乙女になると中学の卒業文集に書きし人あり
人恋しふる里恋し飲むほどに募る想ひよ秋の夜更けは

船田清子

百舌の秋

・天

松永智子

窓

・嵐

燃えいづる若葉と秋の蒼穹を老いてなほこそいのちの糧に
さはいへど足腰痛く脳中にもどりと蒼の渦巻くばかり
年々に優しさ消しきれゆきて落葉の樹を胸中に積む
麗しき泰山木さへただに枯れさくられ黒ずみ無惨を晒す
太陽と共に生き来し人々の老いてなほ持つ力羨しも
朝がらすの声に混じりて「キ」の一音一度目は「キ」とああ百舌の秋
道の辺に見上ぐる木犀嬉しやな間なく香らむ花芽のあまた

東慶寺より仏殿移りしその由縁そぞろにしのぶ名月の夜に
すすきの種供うる旧矢の原家長き良夜を月にしたがう
三溪は大伯父なりと宣る女にえにし頂くこの月の夜に
逆縁の追善の席月華殿息を弔いしその疊ぎわ
芥川の残せる一句「白湯の秋」初音の茶屋の炉辺も今に
琵琶の音にピアノもそえて今風に若きひと奏す荒城の月
薩摩びわ「蟬丸」を弾き終えし時旧燈明寺塔の月影

久に訪ふ老人ホーム冬の日があまねく差してただにしづもる
消掃の行き届きたる廊下なれ冷えびえとして人まばらなり
言葉なくわれに手を挙げほほゑめり一年前に会ひし友なる
繊細な絵筆の運びは過去のもの右手の麻痺がすべてを奪ひぬ
長き廊下見返り見返り手を振り角を曲がりて見えなくなりぬ
「今度会ふ時まで生きてゐるんだぞ」声には出さず友と別れぬ
老人ホームに友を訪ねて帰る道早や夕づきて蠟梅匂ふ

三 浦 好 博

彼岸花

・銚

御代田澄江

休刊日

・茨

公園に妻とせつせと移植せり此岸に見届けたき彼岸花
彼岸花の名所にしたき公園と思へど我には時間が足りず
駐車場になるとふ敷地の彼岸花我に掘られて喜びのたり
もぐらよけによき彼岸花メンバーの動機もありて公園に増ゆ
移し植ゑ増えて来たりし公園の陽に彼岸花の紅高し
里深く限界集落に来たりけりもの言ひたげに咲く彼岸花
不器用な妻ゆゑ感じること多く素敵なものもある不遜言ふ

宮 本 靖 彦

嵯峨野

・凌

堰落つる水白々と連なりて嵯峨野の秋の落暉のはやし
祇王寺に涙せしより半世紀紅葉降る今日思ひあらたに
インクライン寺境内を高架橋 明治の煉瓦が紅葉に映ゆ
色浅き野菊咲く庭水仙の若芽のみどり早も列なす
門に立ち手を振りくれし父母なりき今子孫乗る車見送る
名を知らぬみどりの小鳥今朝も来て金木犀の花をつゝばむ
五十越す息子帰宅のすきやきに妻は上等和牛肉盛る

二 好 聖 二

わくらば

・伊

一房の葡萄の風情に負けていいるすつからかんの言の葉の海
すこしずつ柚子が熟してゆくさまを見にゆく今日のはじまりとして
吐き出だすけむりの輪つか燕麦の葉先で壊す頬落にいる

『樂天記』読み始めるも怠くって投げて眠りにつく秋桜期
ピレーネに逝きし男の言の葉を重ねて氷河の画像を録す

わくらばを爪にかけつぶ跳ね上がる猫におだしきおそあきのかげ
鶴らに譲ればいいと妻がいう稔り少なき庭先の柿

もとむらしげと

朝の風景

・そ

水引草・げんのしようこを庭に見つけ生家を偲ぶ秋の夕暮
庭隅の白南天の実は白く咳止薬とふ薬木にして
あの人この人の顔惚びつつ歌誌を読む時間嬉しき新聞休刊日
中庭の蟻に喰はれし白樺を切りて五つの切株残る
根株を除去玉砂利を敷き枯山水の庭を模すとて業者来たりぬ
炬炬にて歌誌読めば夜心が熱い夜は飲まないヨーグルト飲む
物買ひに行け旅行に出ろと言はれては皆少しづつ大胆にならずや

茂 木 燐

雅号碧蹄館

・埼

俳人磯貝碧蹄館さん雅号の出所いまに知る文禄の役「碧蹄館の戦」あり
碧蹄館そのユニークな俳号の謂はれをはるかその昔「碧蹄館の戦」に知る
手に取りし「日本外史」の下巻にて「碧蹄館の戦」はつとし解ける
錢屋五兵衛の雅号龜巢にある日ふと室鳩巢との類似を思ふ
「夏の白菊」いかな花かと検索に花ならず同名の酒にヒットす
「盛年不重来」をこの頃とみに実感す振りむけば過去の八十年なり
」とさらに効能うたはず売られるせつけん歯磨使ひて飽かず

金色の穂波の中を子どもらは騒りにつつ学校へ行く
二人ゆき二人ゆきて一人ゆく朝の子どもその歩調
先をゆく二つの帽子を追いかけて三つの黄色が歩道を走る
水筒を腰に揺らしてうつむきて幼き憂いあるごとくゆく
信号を渡りて軽くお辞儀するその仕草にも心はなごむ
スツアリ作業着ありのコンビニに朝の活力溢れんばかり
立ち止まり言葉交わしいる作業着がやがて別々のトラックに乗る

八乙女由朗

第11回大会（松島）懐古・柴

横田敏子

夕されば

・福

特技なる山金さんのせり売りは異彩放ちて勢い湧かしむ
こそ泥に遇いし民謡手書帳売りに掛けしむ小野茂樹君
叩き売り上手な山金先生ももて余しけり民謡帳は
民謡帳を值踏み落札せし茂樹後日東京から送り寄こせり
新館に宿せん女性群率いつづくらき夜道を歌い歩めり
尼寺に前泊なし三好直太神妙に写れり和尚の際に
大高森に鹿島茂がとらえたる蝮の肝は大人が呑みたり

山下雅子 潤

・習

たたなわる雲を縁どる金色の夕映え妙なり夕暮れ支う

水たまりを何と言ひしか思い出せぬままに米とぐ ああ涼
何となく怪訝な思いに知りしこの「麿」忘れぬ一語となりぬ

コロナ自肃に足腰弱ればドクターは歩け歩けと戦時の気合いに
国挙げてのコロナ自粛によりたり平等に耐えし戦時の苦痛
新型のコロナと共に存ほのめかすドクターの声真摯に聞けり
ま白なる秋明菊はこぞり咲き病みいる主のささやき聞かす

山野幸司 黙々

・沖

久我田鶴子 蘭

・羊

黙々と稻刈る君とわれ包む大空青く照り輝けり
バインダー時々止まる中古車も元氣働く森に抱かれ
バインダー音彈ませる森田棚呼吸を合わせ稻刈り進む
中食と手を振る先のキラキラと妻も田んぼもわれの命ぞ
稻束を抱え稻架に掛けてゆく友も妻も影となるまで
田の中にめり込み行くバインダー夕暮れはやしエンジンふかす
雨の中それでも稻刈り止められぬ蛙あかるる夕暮れはやし

アイメイクと口紅きれいに仕上げたり今日はマスクの要らないひと日
真っ直ぐに伸びられなかつた茄子、胡瓜一山百円半値に売らる
納豆もち旨しと詠める歌ありてわが口中の妙にネバネバ
磐梯山は空一面の羊雲ふわりと纏い頭を出しぬ
暑さ薄れカーテン引けばひんがしの空通りゆく銀翼光る
春は花秋は紅葉の並木道今日裸木のトンネルとなる
夕されば心許なし入院の長き妹に会えぬ日続く

吉永惟昭

ふるさと

・熊

田原坂越えし高瀬の川向う祖父独り居し父のふるさと
雁回の峯の南や母の里小さき祖母に愛快な祖父
ふるさとの無き我が郷は悪童と呼ばれしままの黒髪界隈
ゆりかごは二度退園の処分うけしくしき黒髪幼稚園なる
小学も黒髪なり戦時中死ねと教うる不合理訓育
少々の悪も許しし旧制の中学だった竜田山かけ
幾百度遊びし竜田の山なるにまだ頂上の場所は知らずき
ここにまた蜘蛛の抜け殻 もうどうでもよくなつた母は掃除もしない
わたばこりに包囲されたる居どころに「く」の字をさらす母の瘦身
ベッドから転げて打ちしかあはら骨ときをりさすり痛みを言へり
森敷の『月山』おもはせ綿ばこり蜘蛛の巣さへも籠もり居の友
百に手のとどく齡とみづからの長生きを言ふ母の小春日
母親を鷄骸などうたひしは齊藤史か 声なく哭けり
老いてなほ白いスースに身をつつむ彼の日の史の大柄な笑み

時の流れ

出口 和子

ありがとう

亡き夫の思い出懐かし聞かせれば「美化されるもの」とクールな息子祭りばやし部屋に隠りてやり過ごす逝きたる夫と時間をたどりて

中秋の名月が呼ぶ窓の外いつもの月を特別と観る

満天の夜空を探すアンドロメダ星団の二五〇万年前の光を死の後は星になりたいたわごとを科学が教えし 孤独な魂孤高なる星々あまた宙にある何億光年その距離解らず

いま光るアンドロメダが見えるのは二五〇万年待たねばならぬ五〇年前ダムのめぐりを通いたり父が教えし新免練習角ひとつ曲がれば天国みゆること低き山間に雲光りおり

ドライブをしながら歌を詠みおればくわばらくわばら蛇よけきれずツクシハギ、オクシモハギにマルバハギ、ピンクのなだれ秋を惜しますうつろえる朝明けだんだん遅くなりねむけまなこに基礎英語きく英会話七十迄にペラペラとなつてた箸を 数年ご猶予

二十九年前秋祭りの日、夫は交通事故で突然逝った。その別れは、水水の様な悲しい絶望が二十四時間身体中を覆ったままという程であった。やっと、二年をやり過ごし、徐々に気をとり直したという思いで

あつた。

また、父との別れは、二人向き合つた介護生活で喧嘩ばかりしていたが「お前ら（弟と私）よ一世話をしてくれたの」。ありがとう」と言い残し、次の日逝った。「こちらこそ、ありがとう」と言えればよかつた。

今生きていれば主人に沢山「ありがとう」と言いたい。愛し慈しんでくれた人達との沢山の別れに、有難うといいたい。日頃から感謝と共に行動し、ありがとうを伝えてゆこうと思う。

歌のお世話を頂いている河野繁子様とは、山野草という共通の趣味があり、何度も連れするうち、歌を作つて一年私と付き合つてみないかとのお誘いを受けた。これもご縁とお受けした。野草の話も楽しく、時には美味しいお惣菜も頂く、有難う御座います。心の裡にいつも感謝が絶えない。

登山の教え

高澤 匠子

山に学ぶ

今月の二人

汗流し沢登りしてのどかわくしぶきの底はソーダ水に見ゆ
 厳しくも友とはげまし登る道靴の音のみ聞こえる時間
 真夜中に起きて準備を黙々と今日の山行不安いっぱい
 山行後ベースキャンプで反省会テントの中で決意湧きいる
 雪渓の中に埋めたるデザートは冷えたゼリーでよろこぶ友と
 冬山へスキーを担ぎ家を出る重き装備にひょろひょろしつつ
 キスリング共同装備でふさがれる己は駒のひとつなりしか
 高一は寝袋無しの冬合宿足をザックに突っこみ眠る
 職きまり君が作りし山行は秋のおわりの八ヶ岳なり
 冷静な君の判断正しかり縦走中の遭難まぬがる
 一夜明けテントの外は雪景色梢に光る氷まぶしき
 寒波来て一日テントにこもりたり残りキャベツの食事でしのぐ
 テント出で小雪舞う道下りゆき遂に聞こえ来里の人声

私の初登山は小学校四年生の時の新潟県の弥彦山（633m）でした。頂きから目に入った広大な越後平野と佐渡島が浮かぶ青い日本海は今でも忘れられません。幼い頃より運動がまるつきりダメだと自他共に認めていた私が、登山に出会いようやく自信を持てるようになりました。

高校は女子高登山部に入部し、毎月近郊の山へ。顧問は日本山岳協会の方で訓練や山行などはレベルの高いものでした。大学では登山もする離島研究会に入りました。結婚した夫もワングル部出身。結婚前も結婚後子どもが生まれてからも、家族で山歩きやキャンプを楽しんできました。振り返ると、自分の人生は不器用でもコツコツ続けているものが多く、衣食住の基本や精神などを学べた登山の教えが原点だったと気づきました。

御縁があり、今、短歌のふもとを歩いています。相変わらず不器用ではありますのが、日々の暮らし、自然、人との出会いなどをじゅうで愛でながら五感を大切に感じたものを詠っています。こんな私を大らかに受け止めて、「続けることが大事よ」と背中を押してください。高津砂千子先生には感謝の気持ちでいっぱいです。

◆今月の二人・出口和子作品評◆
ピンクのなだれ秋を惜します

◆今月の二人・高澤匡子作品評◆
秋のおわりの八ヶ岳なり

評者・久我田鶴子

出口さんは、広島県廿日市市在住。二十九年前の秋祭りの日に、交通事故により夫は帰らぬ人になったという。

祭りばやし部屋に隠りてやり過ごす過ぎたる夫と時間をたどりて

秋祭りの頃ともなると、殊に思い出される「さう夫のこと」。祭りばやしを「やり過ごす」という。「やり過ごす」に籠められた思いを思わずにはいられない。下の句は、「亡き夫が傍に来て、共に過ごした時間を作りと一緒につなぎたっているようだ。

・満天の夜空に探すアンドロメダ星団二五〇万年前の光を

夜空に探す二五〇万年前の光。夫亡き後の二十九年間を起点としての、遙かなる時間の流れに佇んだことだろう。

・角ひとつ曲がれば天国みゆること低き山間に雲光りおり
角を曲がって視野が開けた感じが、生き生きとに伝わってくる。

低い山の間に光る雲。ため息の出るような美しさだったにちがいない。「天国みゆること」の比喩が、そう感じさせる。

・ドライブをしながら歌を詠みおればくわばらくわばら蛇よけ
されず

活発な作者の一面を見るようだった。そして、ひやりとした

後に作者が感じたものも共有するようだった。気をつけて!・ツクシハギ、オクシモハギにマルバハギ、ピンクのなだれ秋を惜します

山野草好きの面目躍如。萩にもいろいろな種類があることが知れる。それぞれに枝垂れた先にピンクの花を咲かせている見事さ。秋を惜しみなく咲き満ちている美しさ。

高澤さんも廿日市市在住。女子高時代に登山部に入部して以来、登山から学んだことが生きる原点にもなっているようだ。

・汗流し沢登りしてのどかわくしぶきの底はソーダ水に見ゆ沢登りをして渴いた喉には、しぶきを上げる流れの底がソーダ水に見えたと言う。三句で切ったところから、きびきびとした動きと臨場感が生まれている。

・高一是寝袋無しの冬合宿足をザックに突っこみ眠る。
高一の思い出と言えば、寝袋無しの冬合宿足、なのだろう。

足をザックに突っこんで寒さを凌ぎつつ眠った夜のことは、いつまでたっても過去にはならない。現在形である。

・職きまり君が作りし山行は秋のおわりの八ヶ岳なり

ここでの「君」は、ワンゲル部出身で作者の夫となつた人のことか。「職きまり」という初句が物語を思わせる。作つてくれた山行計画は秋のおわりの八ヶ岳だった。それだけしか言つてないが、満たされた思いは伝わってくる。

・一夜明けテントの外は雪景色梢に光る氷まぶしき
前の歌の続ぎだらうか。秋の終わりの山行は、思わぬ天候の変化で一夜明けてみると一面の雪景色に。見上げた梢には、雪が凍りついて光っている。そうした一つ一つが鮮烈な思い出となつた山行だったのだろう。

・寒波来て二日テントにこもりたり残りキャベツの食事でしの
テントに二日も足止めされた思い出。今となつては、残りキャベツで凌いだこともどこか懐かしげである。

ぐ
前回の歌の続ぎだらうか。秋の終わりの山行は、思わぬ天候の変化で一夜明けてみると一面の雪景色に。見上げた梢には、雪が凍りついて光っている。そうした一つ一つが鮮烈な思い出となつた山行だったのだろう。